

[基調講演]

華岡青洲と麻酔

松木 明知

弘前大学大学院医学研究科麻酔科学教室(弘前大学名誉教授)

千数百年を数えるわが国の医学の歴史の中で、紀州の華岡青洲ほど西欧諸国にまでその名が知られた江戸時代以前の医師はいない。これは青洲を海外に紹介・顕彰した先学の努力によるところも多いが、偏に当時の青洲の医学、医術が際立って優れたものであったからに他ならない。というのは、華岡一門以外の多くの流派の外科医たちが拱手して傍観する以外に方法がなかった疾病を青洲が外科手術によって治療したからであった。それが可能であったのは青洲が「全身麻酔法」を開発したからであった。

「麻酔」は一般には理解しにくい現象であり、このため「麻酔」という言葉の定義も曖昧模糊とした感じを人々に与える。「麻」は「魔」と同音であり、「麻薬」の「麻」であり、「酔」は「睡」と同音で、しかも意味も近似している。巷間「麻酔をかける」と言うが、これは誤りで、「麻酔を行う」が正しい。このように「麻酔」に対する一般的理解が乏しいため、麻酔法の開発が最大の業績とされる華岡青洲の研究において、麻酔科学的立場からの評価がなされてこなかったし、誤った記述がなされてきたのである。この講演では時間の関係上、演者がこれまで行ってきた研究を中心に2, 3の話題について述べて見たい。

青洲がいつ全身麻酔薬の開発を想いつたのかははっきりしない。2, 3のエピソードが伝えられているが、伝聞の域を出ない。永富独唱庵の著書「漫遊雜記」を読んで奮奮したことは確かである。しかしその時期は京都遊学中と思われるが、正確なことは知られていない。青洲は京都遊学中に、すでに乳癌の手術を行っていた岩永氏に師事してオランダ流の外科を学んでいることを考慮すれば、永富の著書に刺激されて、岩永の門を叩いたのかも知れない。

麻酔薬がいつ完成したかの正確な時期も知られていない。寛政8年(1796)に書かれた中川修亭の「麻薬考」の序によれば、青洲がすでにボランティア10数人に対して麻酔薬を投与して成功を収めているのを修亭が目撃しているから、その頃までには麻酔薬が完成の域に達していたと思われる。しかし青洲が実際に最初の臨床例に成功したのは1804年であったから、それまでに8年余の時間的空白がある。この期間をどのように解釈するか大きな問題であるが、一つの理由として青洲は極めて慎重であったと考えたい。

前述したように青洲が和州五條駅の藍屋利兵衛の母「勘」に対して麻沸散を投与し、全身麻酔下に左乳房の癌腫瘍を摘出したのは文化元年(1804)10月13日であった。患者の名前、術者の名前、手術の期日、そして信拠すべき史料が残されている点において、この症例は世界で最初の全身麻酔下の手術例と評価されているのである。

従来、この最初の手術は翌年の文化2年(1805)に行われたとされていたが、演者が五條市の講御堂寺の「引導靈簿」を精査して「勘」が文化2年2月26日に没していることを見出して、手術日は文化元年と確定した。僅か1年の差であるが、医学史的には大きな意義がある。

青洲はこの第一例の手術は失敗であったと考えていたと演者は推察している。「乳岩姓名録」によれば2番目の手術は文化2年1月6日に和州狐井村の彦右衛門の妻に対して行われており、3番目の手術は「乳岩姓名録」によれば文化3年(1806)6月12日の大田屋太郎兵衛の妻であるが、実はそれ以前に4月8日に大阪・座間の河内屋清右衛門の妻の手術が行われている。したがって2番目の手術と3番目の手術時期に1年3か月の間隔がある。「乳岩姓名録」を通覧しても、各手術間の時間的間隔がこのよ

うに1年以上も空いている例はなく、これは青洲が「勘」の手術を反省して、早期に死亡した原因などを考究していたため彼が意図して手術を行わなかったと推察している。このことも前述したように「麻沸散」の臨床応用におけると同様に青洲が極めて慎重であったためと演者は考えている。

乳癌の手術例が20数例に達した時、一部の弟子の間から、青洲に著書の執筆を求める声が上がった。赤石希範や野村 鄂らであった。しかし青洲はこの企てに賛意を表さなかった。当初、青洲は著書の執筆を考えていた痕跡も朝倉荆山の青洲宛の書簡によって窺い知ることが出来るが、最終的に出版に踏み切らなかった。青洲没後に春林軒に残された図書目録「華岡遺書目録」を作成した越後・長岡藩の門人佐藤時敬は青洲の在世中の言葉として「吾術は心に得て手に応ず。口言う能わず、筆書く能わず。」(原漢文)という青洲の基本的考えを示し、それ故に著書の出版を勧めても「此れ、糟粕のみ。何ぞ為すに足らん。」(原漢文)として青洲が弟子の勧めに応じなかったことを紹介している。青洲は医術において飽くまでも「術」(「知」に対しての言葉で、広い意味でクラフトと云ってもよい)の重要性を主張したのである。

これまで述べてきたように、青洲の最大の業績の一つは全身麻酔下に手術を行ったことであるが、中でも最も精力を注いだのが、乳癌の手術であった。このことは「麻沸散」を用いての最初の症例が藍屋勘の乳癌腫瘍の切除術であったことによっても理解されよう。

青洲の乳癌手術はどのような成績であっただろうか。演者は手術患者が術後どれくらい生存したかを調査した。「乳岩姓名録」には青洲生存中の手術患者154人(再発、3発患者を含む)が記されている。この中で住所が明確に分かるのが140人で、演者はこの内33名の没年月日を特定した。演者の青洲研究で最も時間を要した調査であった。患者は平均して52カ月生存した。患者が藁にも縋る思いで、そして彼らの多くは癌が大分進行した状態で手術を受けたことを考慮すると、この成績は大変優れたものであったと言えよう。参考までに記すが、九州大学三宅外科の胃癌手術の術後1カ月以内の死亡率は33.1%(明治37, 1904-大正3, 1914)であった。

青洲は開発した全身麻酔薬を「麻沸散」と称した。「乳巖治験録」にもこのように書かれている。しかし現今流布している一般読者向けの書籍はもちろんのこと、青洲の研究書においても「通仙散」が一般的名称で、時として「通仙散(一名「麻沸散」)」と記述しているのが大部分である。管見であるが、江戸期の写本では麻酔薬を「麻沸湯」あるいは単に「麻沸」と記しており、「通仙散」と記した写本は見ることがない。本間玄調も鎌田玄台も彼らの著書の中で「麻沸湯」の名称を用いている。「通仙散」は華岡青洲の墓誌銘のみに見られる呼称であり、青洲自身が「乳巖治験録」の中で「麻沸散」の呼称を使用していることを考慮すると、今後は少なくとも「麻沸散(一名「通仙散」)」と表記すべきであろう。